JVC Japan International Volunteer Center

329 | 2018 冬

［￥500］年4回発行

TRIAL & ERROR

JVC 日本国際ボランティアセンター会報誌 トライアル・アンド・エラー（試行錯誤）

［特集］南スーダン。400万人の避難生活

400万人。人口の3分の1が今も恐怖と不安のなかで生きている

［寄稿］カンボジア、絶えゆく民主化への夢

カンボジア。独裁のなかに生きる人びとを撮る

［報告］南アフリカ現地スタッフの半生

人生で学んだことを子どもたちとの活動に

［報告］イラク北部の現状について

分離独立を求める住民投票をきっかけに深まる混迷

人道危機が続く南スーダン、首都ジュバの国内避難民キャンプ。故郷の村に帰る目途もなく、慣れない土地での生活が続く。食料配布に頼っていた生活が少しづつ変わり始めた。「援助を待っているだけの生活はしたくない」キャンプ内の空き地を耕し、水を引いて穀物や野菜を栽培する女性が増えている。

［特 集］南スーダン。400万人の避難生活

400万人。人口の3分の1が今も恐怖と不安のなかで生きている

昨年、稲田朋美防衛大臣（当時）の訪問を境に
注目を浴びた南スーダン。
だがその報道は、日本の自衛隊のPKO増派や撤収を巡っての
報道に終始し、同国の内戦で生まれた
避難民の困窮した生活を伝える視点はほとんどなかった。
自衛隊が撤退した今、同国に関する報道はなくなったが、
現地ではいまだに人々は不安定な生活を強いられている。
その最新情報を共有したい。

自衛隊は去った。忘れさられた人々のために何ができるか

人道支援／平和構築グループマネージャー／南スーダン事業担当
今井 高樹

自衛隊が南スーダンを去った今でも、内線で生活を破壊された人々は恐怖のなかで生きている。村への襲撃、殺戮、誘拐、レイプ…。都市部でも、ジャーナリストの逮捕、殺害、新聞社の閉鎖が続いている。それでも勇気を振り絞って、反戦デモの実施や反戦Tシャツを着こむ市民もいる。一方、日本政府は、治安の安定ではなく、大型インフラ開発を示唆。それが内戦を生んだ背景である利権争いに直結しないか。

続く暴力の連鎖と人道危機

頭のすぐ上を通過する飛行機の音で、テントから顔を出した避難民女性との会話が遮られた。

2017年11月の出張時に訪問したマンガテン国内避難民キャンプ。首都ジュバの郊外、空港への着陸ルートの真下にあり、援助物資を積み込んだ国連や赤十字国際委員会の輸送機がひっきりなしに飛び交う。物資は大型機でジュバに運ばれ、南

中央エクアトリア州ロボノク郡にある、焼き討ちにあった村。生き残った人によれば、殺された村人の死体は火に投げ込まれたという（提供：南スーダン教会評議会）

南スーダンの内戦で人々の生活は破壊された。国際支援の手が回らなかったマンガテン国内避難民キャンプでJVCは食料配布を実施した

スーダン各地には食料を空中投下するための小型機が飛び立っていく。それは、まさにこの国の人道危機を物語っていた。

音が鳴りやむと、子どもの手を引いた母親が訴えてきた。

「紛争で夫を亡くし、子どもを連れてジュバに避難してきました。住んでいた村は、つい2日前にも襲われ、また村人が殺されたと聞きました。ここには仕事も食べ物もない。だからといって、これでは村に帰ることもできない」

国連からの情報では、ジョングレイ州にある彼女の村は、200人の武装グループの襲撃を受けた。数百の家々が焼かれ、40人が殺害され、女性と子ども合わせて50人が誘拐されていた。

17年5月に自衛隊が撤収して以降、日本のメディアから南スーダン関連のニュースは消えた。

現地の状況は好転していない。ジョングレイ州での襲撃事件のような暴力は後を絶たない。国外に逃れた難民200万人、国内での避難民200万人の計400万人――国民の3人に一人――が帰還する目途もなく避難生活を送っている。そして国民の半数が深刻な食料危機に直面している。世界最悪の一つと言われる人道状況は、今も変わっていない。

民族対立は原因ではなく結果

南スーダンは、半世紀にわたる内戦の末、11年にスーダンから分離独立を果たした世界で最も新しい国連加盟国である。

独立の喜びも束の間、13年12月には国内での紛争が勃発。キール大統領派とマシャール元副大統領を中心とする反キール派との政治対立がエスカレートし、国軍が両派に分裂して戦闘が始まったのである。

この争いを、キール氏の出身民族であるディンカ人と、マシャール氏が属するヌエル人との「民族紛争」として描く報道は多い。しかし両者の対立の背景には、もっと現実的な、油田、土地、国外からの援助資金など様々な利権争いがあったとされる。キール、マシャール両氏、その側近の政治家たちを含め、競うよ

うに巨額の不正蓄財を行っていたことはアメリカの調査団体（注1）によってすでに明らかになっている。

南スーダンのある友人は、「民族対立は、紛争の原因ではなくむしろ結果なのではないか」と疑問を投げかけ、次のように語っていた。

「両民族は、小さな争いごとはあっても隣人として千年も共存してきた。こんなに憎しみ合うようになったのは、内戦のせいではないのか」

和平合意が崩壊、戦闘はさらに拡散

15年8月、国際社会の仲介で和平合意が結ばれ、キール、マシャール両派による統一政府が発足。だが両派の溝は埋まらず、翌16年7月にジュバで戦闘が再発し統一政府は瓦解。自衛隊「日報」で明らかになったように、自衛隊の宿営地周辺でも激しい戦闘が行われた。

ジュバを追われたマシャール派の軍勢がコンゴ民主共和国、ウガンダとの国境方面に移動したため、キール派の軍が追撃し、エクアトリアと呼ばれるこの地域に戦闘が拡散した。ディンカ人でもヌエル人でもない、他の民族の村々が襲撃され、殺戮、誘拐、レイプ、略奪が繰り返された。新たに数十万人の難民が発生し、南スーダン難民は一気に200万人に膨れ上がった。

襲撃を受けた地域住民も黙ってはいない。自警団を組織し、報復攻撃に出る。多くの民族が憎しみと暴力の連鎖に巻き込まれ、新たな「民族対立」が生まれた。マシャール氏が国外に逃れてその影響力が弱まったこともあり、新しい反政府武装勢力が結成され、事態はますます混乱を極めていった。

言論弾圧にも屈しない人々

「早く戦争が終わって欲しい。故郷の村に帰りたい」

国内避難民キャンプで会う人々は、口々にそう言う。紛争の中で誰もが疲れ切っている。

国際社会からの圧力もあり、17年5月、キール大統領は「国民対話」と呼ばれる和解の取り組みを開始した。しかし、マシャール派は参加しておらず、成果には乏しい。

政府軍による住民への襲撃や略奪行為を黙認し続け、紛争解決に前向きとは言えないキール政権に対する市民の批判は強い。それらを封じ込めるため、政権は徹底的な言論弾圧を行ってきた。ジャーナリストの逮捕、殺害、新聞社の閉鎖等である。弾圧は一般市民にも及び、私の友人たちは常々、「電話は盗聴されている。政府批判の疑いをかけられたら投獄される」と恐れていた。

ジュバには、ブルー・ハウスと呼ぶ「政治犯」専用の収監施設が用意され、怖れられている――「一度入ったら、二度とは出てこられない」

それにもかかわらず、人々は黙っているわけではない。

ジュバ市街で、女性たちが平和を求める「サイレント・マーチ（沈黙の行進）」が行われたのは12月9日。国際ニュースを見ると女性たちが口にテープを貼り、無言でデモを行っていた。手にしたプラカードには、「流血はもうたくさん」「子どもには銃でなくペンを」といったメッセージが並ぶ。

こうした直接の意思表示ではなくても、ラップなどの音楽に乗せて、或いはクルマの車体やTシャツにメッセージを書き込んで反戦を訴える人々は少なくない。

乗り合いバスを見ると、車体にカウボーイハットの男が描かれていた。顔は「わざと」似せていないが、カウボーイハットがキール大統領のトレードマークだとは誰もが知っている。男の絵の横には「あんた、話し合わなきゃダメだよ」

待ちかねた停戦合意

国際社会、とりわけ、南スーダンの安定化を地域の重要課題と認識している周辺国（東アフリカ地域機構：ケニア、エチオピア、ウガンダ、スーダンなど7ヵ国）は、破綻した15年和平合意の「再生」を掲げ、停戦に向けた仲介努力を粘り強く続けてきた。それが結実し、12月21日、南スーダン政府（キール大統領）、マシャール派、その他の武装・非武装グループを含め十を超える主要政治勢力がアディスアベバに一堂に会し、停戦

◎注1…War Crimes Shouldn't Pay/an investigative report by SENTRY
https://thesentry.org/wp-content/uploads/2016/08/Sentry_WCSP_Final.pdf

避難民キャンプを尋ねる今井

避難民キャンプのテント。ここで6家族、約30人が生活する。家財道具はほとんど何もない。

合意に署名した。

紛争勃発以来、いくつもの停戦合意が署名されながら、すべて破棄されてきた。今回も、合意が守られるかどうか、多くの関係者が懸念しているのも確かだ。合意が実行されることを期待したい。

日本政府はどうして大型インフラ支援再開なのか

南スーダンの紛争解決に向けて、日本政府はどう関与しているのか？

自衛隊の撤収を発表した17年3月の記者会見で、安倍首相は「国際社会と手を携え、南スーダンの平和と発展のためできる限り貢献する」と表明した。具体的には、東アフリカ地域機構が推進する和平プロセスの支援や、南スーダンの「国民対話」支援、ほかに公務員の人材育成や人道支援などが挙げられていた。

しかしその後、日本による目立った動きは見られない。防衛大臣の辞任で「日報」問題に「区切り」を付けた後は、南スーダンのことなど忘れたかのように見える。結局のところ、自衛隊の南スーダン派遣は、国際社会や相手国への貢献というよりも、海外派兵の実績作り、安保法制の「駆けつけ警護」や「宿営地の共同防護」の適用事例作り、と言われても仕方ないだろう。

一方、いま現地ではインフラ整備などの分野で日本の支援再開が注目を集める。私の出張中、在南スーダン日本大使が何度も国営テレビに登場し、ナイル川第二架橋をはじめとする開発事業再開を示唆していた。

しかし、紛争が解決せず、多くの国民が避難生活を送り食料危機に直面する状況で、大規模インフラの優先順位がどれだけ高いのか。大型の開発案件が、今の紛争の背景でもある利権争いを助長しないか。少なくとも、和平プロセスの進展を見極めるまで案件は保留すべきではないのだろうか。

日本政府の動きを監視するのは私たち市民の役割でもある。今後、現地での活動を行いながら注視していきたい。

コラム JVCの研修が私の人生を変えた

聞き手：今井高樹

2006年からの3年間、JVCはジュバで車両整備工場を運営し、難民キャンプから帰還した若者たちへの整備士研修を行っていた。巣立った卒業生は女性4人を含む32人。それから10年、今はどうしているのだろうか？ 当時の女性研修生のひとり、ポニ・ベティをジュバ郊外の自宅に訪ねた。

―― 卒業したあとの経歴は？

最初は、JVCを引き継いでSCC（スーダン教会評議会）が運営していた整備工場で見習いね。その間に結婚、妊娠したので、いったん退職して出産、子育てをすることにしたのよ。

―― 復帰したのは、いつ頃？

結局、SCC整備工場には復帰しなかったのね。子育てが一段落してから、就職を探して、整備士として採用されたのが『国境なき医師団』。3年前くらいね。

―― 有名な国際NGOだし、いい就職先を見つけたね。

そう思うわ。入職したての頃ね、整備をしていたら同僚から『どこで整備士の訓練を受けた?』と聞かれて、『ジュバで受けた』って言ったら、誰も信じてくれないの（笑）。『それだけの腕前なんだから、絶対に国外で教育を受けたはずだ。ジュバにそんな訓練所があるわけはない』ってね。

―― なるほど。今は毎日どんな業務を？

定期点検が中心ね。『国境なき医師団』は車のメンテナンスにも気を遣っていて、所有車両は毎週1回、必ず点検のために入庫してくるのよ。だから大忙しよ（笑）

―― そりゃ、やりがいがあるね。

そう、この仕事について良かったと思う。JVCには、本当に感謝している。あの時の研修で、私の人生が変わったのよ。

「国境なき医師団」の整備工場には、ポニのほかにもJVC研修の卒業生が1名働いている。赤十字国際委員会の整備部門に至っては、12名の整備士のうち半数の6名がJVC卒業生。ほかにもUNMISS（国連PKO）をはじめ国連機関や国際NGOで卒業生たちが活躍している。治安面の不安と未舗装の悪路が交錯する南スーダンで、車両整備は人命にもつながる重要な仕事。彼ら彼女らは、今日も南スーダンの人道支援活動を陰で支えている。

避難民キャンプ。緊急支援から「自分で何かを始めたい」

人道支援／平和構築グループマネージャー／南スーダン事業担当
今井 高樹

生活のすべてを奪われて避難民キャンプに住む人々に対して、やるべきことは二つある。一つが食料と物資支援。もう一つが、避難民自らが生活に必要なモノを購入できるような収入源をもつことだ。その意識が避難民キャンプで芽生え始めていた。自らを助ける尊厳をどう支援するか。新たな動きが始まりそうだ。

マンガテン国内避難民キャンプ

ジュバ緊急支援と、次の課題

2016年7月、戦車や軍用ヘリを動員した激しい戦闘がジュバ市街地で行われ、住民は深刻な被害を受けた。家屋の破壊や略奪のなか、約4万人が一時避難したと言われる。

情勢が一定の落ち着きを見せた9月、私は、ジュバ郊外の国内避難民キャンプでの緊急食料支援を実施した。これを皮切りに、17年7月まで計4回渡航し、食料支援、蚊帳やせっけんなどの生活用品支援、医薬品支援を実施してきた。

国連による食料支援は、巨大な人道危機のなかで、小規模の避難民キャンプまでは回っていなかった。子どもたちは野草の種で飢えを凌いでいた。JVCが配布した食料は半月分でしかなかったが、間違いなく人々の生活を支えることができた。

しかし、食料が尽きる半月後にはどうするのか、配布を繰り返す資金的余裕はなく、仮にあったとしても、それが「解決」になるわけではない。食料危機が深刻だからこそ、それを少しでも自分の手で獲得できるような支援にシフトする、それを課題として11月に渡航した。

紛争の発火点だったマンガテン

JVCが活動するマンガテン国内避難民キャンプは、ジュバ市街地の北西、空港近くに位置する。日本の自衛隊が駐留していた元宿営地からは約1キロの距離である。

以前、この地区には多数のヌエル人が住んでいたという。そのため、13年12月のジュバ市街戦では敵対するディンカ人の武装グループから標的とされた。激しい戦闘があり、元々の住民の大半はこの場所から逃走したと言われる。

多くの空き家が残ったマンガテン地区に、やがて避難民が住み始めた。そして15年、南スーダン政府が二つのキャンプを開設。キャンプ①には約200世帯、500メートルほど離れたキャンプ②には約500世帯が住む。ジョングレイ州、ユニティ州、エクトリア地方など、南スーダン各地からの国内避難民である。

コラム キャンプの空き地は野菜畑

キャンプ①は、キャンプ②よりもはるかに土地が広い。みんな、テントの周囲に畑を作っている。北部のユニティ州から避難してきたアンジェリーナさんは自分の農具を持っていないが、近くのテントの人から借りて野菜を作り始めた。

トウモロコシ、サツマイモ、オクラ、ナス、落花生、カボチャ……ひとつひとつの畑を見せて説明してくれるアンジェリーナさんは、とてもうれしそう。

「配布された食料だけでは食べていけない。こうして畑仕事をして家族で食べている。自分の農具があれば、もっと耕せる」

2018年の耕作シーズンに向け、JVCは農具や灌漑用具の支援を検討している。

アンジェリーナさんと友人のナス畑

自分たちで作ったクッキーを売る避難民女性たち（中央は今井）

キャンプでの生計活動

「今回は食料の配布も、生活用品の配布も、ありません」

キャンプ②を訪問し、テントの脇の木陰に女性たちが集まると、私はそう切り出した。

「食材などを買うために、皆さん、どうやっておカネを稼いでいるのか、聞かせてもらえませんか」

さっそく反応がある。

「ここにいるのは、みんな夫をなくした女性ばかり。おカネなんてない」

「食料は、配布されたものを少しずつ食べるしかないわ」

「栄養不足で、薬を買うおカネもない。だから今年もたくさんの子どもが死んじゃったの」

みな、懸命に窮状を訴えてくる。それはそうだ、と思いつつも、次の質問に移る。

「誰か、市場で日雇いの仕事をしている人はいますか？」

首を横に振る人が多い。

「一日働いたって、100南スーダンポンド（現地通貨。以下ポンド）にしかならない。誰もやらないわ」

100ポンドは日本円で約50円。この日当では、主食用のカップ1杯のトウモロコシ粉も買えない。

「では、食用油やせっけんを買うおカネは。どうしているのですか？」

ここで反応があった。

「野菜を作っていてね、オクラ、落花生、サツマイモとか。それを一盛り10ポンドで売るのよ」

「その10ポンドで何を買いました？」

「トウモロコシ粉と……それから、このサンダル買ったわ」

嬉しそうに見せるので、皆から自然に笑いが起きた。

「でも、野菜作りができる土地はこのキャンプには少なくて。だから、みんな薪拾いや竹拾いをしている」

薪拾いは分かるけれども、竹拾いとは何か？　聞くと、住宅建材の竹の廃材を燃料用として集め、一束10ポンドで販売。何束も集めればトウモロコシ粉くらいは買える。

キャンプ内の小さな市場

気が付くと、多くの女性が集まり、木陰はいっぱいになっていた。

「クッキーを焼いて売っている人なら知っているよ」

誰かがそう言うと、次々に、「私もクッキー焼いてる」「自分だって、お茶屋さん（露店喫茶）をやっている」「大きな市場で野菜をまとめ買いして、小分けしてキャンプの露店で売っている」と声が飛んできた。実に様々な小規模ビジネスがある。

露店を出しているというロイスさんは、立ち上がって言った。

「援助物資を受け取るのを待っているだけなんて、よくない。自分たちで何かがしたいのよ」

小規模ビジネスのほとんどは、キャンプ内の小さな市場で行われていた。みんなでゾロゾロと見に行く。

掘っ立て小屋のようなトタン屋根の下には、避難民女性たちの店が並んでいた。野菜や食用品、自分で焼いたクッキー、お茶屋さん。トウモロコシやサツマイモをホカホカに茹でて売っている人もいる。カメラを向けると、みんなよく笑う。

驚いたのは、せっけん販売。製造法を尋ねると、近所の手洗い場を回って使い古したせっけんのカケラを集め、鍋で溶かして固めるのだという。まさにせっけんのリサイクルだ。

避難民キャンプの女性は、困難に直面しながらも、元気に自分たちのビジネスをしていた。とはいえ、キャンプ全体では「元手がない」「やり方が分からない」と、一歩を踏み出せない女性も多数いるという。

「また来ますね。その時には、皆さんの収入向上の活動を支援できるよう、また話し合いましょう」

いつになく明るい気持ちでキャンプを後にした。次の出張が待ち遠しい。

あなたの今「観るべき一本」がわかる!

JVCらしからぬ オススメ!! エンタメ映画チャート

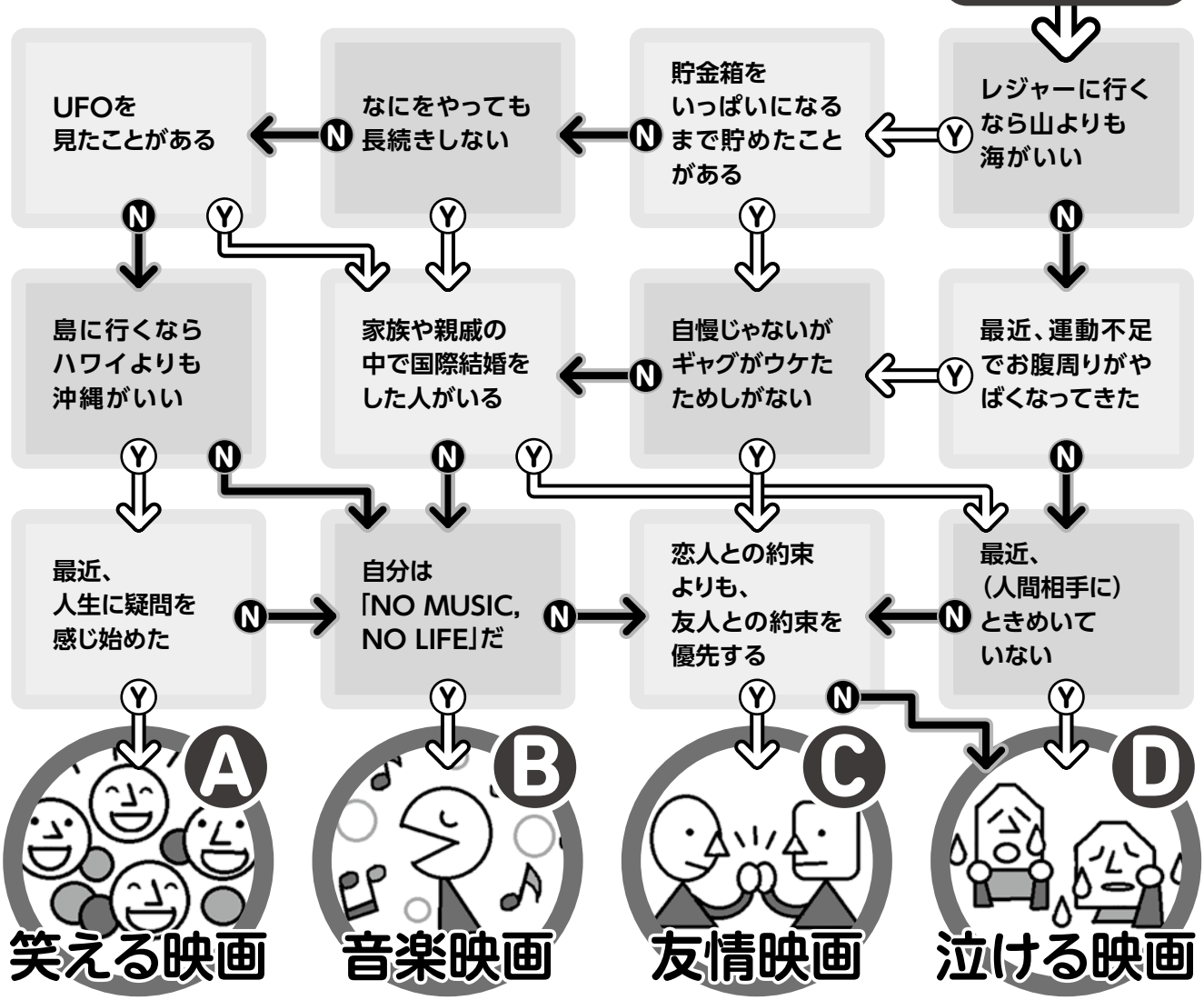
JVCアフリカボランティアチーム 中村 俊哉

こんにちは、JVCアフリカボランティアチームの一員であり、JVCランニングチームのキャプテンも務める中村といいます。私のもう一つの顔は、大の映画ファンです。昨年6月の会員総会で「『TRIAL&ERROR』の企画記事を考えよう」というコーナーがあり、その時私は、JVCには世界各地で国際貢献活動に従事し、活動地の文化について造詣が深いスタッフが多いことから、彼ら・彼女らにオススメの映画を挙げてもらい、【イエス・ノー】チャートと組み合わせて、「観るべき一本」を紹介するというアイデアを出しました。
それが今回、数ヵ月の時を経て、本誌編集担当の細野さんにご協力いただき、実現に至りました。題して、「JVCらしからぬ オススメ!! エンタメ映画チャート」! 皆さんの「観るべき一本」となった映画が、劇中で描かれた国に暮らす人々の暮らしを深く知るきっかけになれば幸いです。また、この企画から、会員の皆様それぞれの「お気に入りの一本」について語り合う場が生まれたら、どんなに素晴らしいことかと思います。

各質問ごとに「YES」か「NO」を選んでお進みください。

YES Ⓨ⇒ NO Ⓝ→

START



Ⓐ～Ⓓのおすすめ映画解説は左ページへ…

イラスト かじの倫子

「アタック・ナンバーハーフ」

◎2000年／タイ

タイの国体出場を目指すバレーボール・チーム。新任の女性監督が新たに選抜した2名がともに「オカマ」だったことから、チームは大混乱へ。しかし周囲からの反感やチーム内での衝突を乗り越え、チームは試合を勝ち進んでいく――。王道スポーツものにLBGTの側からの視点を真摯に盛り込んだ実話ベースの傑作。今回選考に一番苦しんだのがこの「笑える」枠。個人的には、終盤に彼（彼女？）らが陥る極度の不振の原因とその解決策に、「納得！」の笑いでした。（細野）

「歌声にのった少年」

◎発売 ニューセレクト ◎販売 アルバトロス
◎税抜価格 3,800円 ◎2015年／パレスチナ

パレスチナのガザ地区に暮らすムハンマドは、姉のヌールたちと組んだ小さなバンドで歌う少年だ。しかし、「スターになって世界を変える」と語り合ったヌールが重い病気にかかってしまう。やがて青年となったムハンマドは、夢をかなえるべくレバノンの大人気オーディション番組への出場を決意する――。「占領」も背景として存在はしますが、それよりも、歌と夢とがもつ、若者の人生と社会に与えうる影響を、実話をもとにさわやかに描いた好作品です。（細野）

「マンデラの名もなき看守」

◎発売・販売元 ギャガ ◎税抜価格 1,143円
◎2007年／南アフリカ共和国ほか

南アフリカの刑務官だったグレゴリーはコサ語を理解できたため、流刑地ロベン島でネルソン・マンデラの監視という任務に就く。当初、マンデラを死刑にすべきと考えていたグレゴリーは、彼と出会い、その威厳ある態度に接することによって、考え方を変えていく。そして、マンデラ釈放で世界中が注目した1990年2月11日がやってくる。南アフリカの歴史を知ると同時に、国や人種を超えた友情に心を打たれる名作です。（中村）

(C) ARSAM INTERNATIONAL. CHOCHANA BANANA FILMS, X-FILME CREATIVE POOL. FONEMA FUTURE FILM AFRIKA

「私の頭の中の消しゴム」

◎発売・販売元 ギャガ ◎税抜価格 1,143円
◎2004年／韓国

日本のテレビドラマ『Pure Soul～君が僕を忘れても～』を原作とした映画。建設会社社長令嬢のスジンと建設工事現場で現場監督として働くチョルス。育った環境の違う二人が互いに惹かれ合い、結婚するが、幸せな時間は長くは続かず、スジンが若年性アルツハイマーに侵されていることが判明する。公開当時、日韓で話題になったこの作品。観る前にあらすじは知っていたのですが、それでも、私はとめどなく流れる涙を止めることができませんでした。（中村）

© 2004 CJ Entertainment Inc. & Sidus Pictures Corporation. All rights reserved. Based on the television program "PureSoul" Created and produced by Yomiuri Television, JAPAN 2001

講演する著者の後ろのスライドに映るのは、2016年、フン・セン政権による権力の横暴、人権弾圧や著名な政治評論家の暗殺に対し、強く抗議をする市民たち。

［寄稿］カンボジア、絶えゆく民主化への夢

カンボジア。独裁のなかに生きる人びとを撮る

1980年、国交のなかった時代からカンボジアに関わり続けるJVC。2017年11月21日、スピーカーにフォトジャーナリストの高橋智史氏、JVC元代表で顧問の熊岡路矢、事務局長の長谷部貴俊、聞き手にジャーナリストの堀潤氏を迎えたシンポジウム「カンボジア最前線2017」を開催した。満席の会場で、登壇者全員が口を揃えた「弾圧が加速する」同国で、15年にわたり取材活動を続ける高橋氏に話を聞いた。

フォトジャーナリスト
高橋 智史

復興の裏で潰される人権

「いったいいつになったら正義がこの国に訪れるんだ！」。「暴力で抑えつけるやり方は、ポル・ポト政権時代の苦しみと何一つ変わらない！」

あるデモ現場での、フン・セン政権に対する人びとの心からの叫びだ。

30年以上にわたり首相が変わらぬ実質的な独裁体制を続けるカンボジア。その頂点には、元ポル・ポト軍の司令官の一人であったフン・セン首相が君臨している。

その長期支配体制の歪みがもたらす権力の横暴は、異を唱える政敵を時に暗殺し、人権の確立を求める人びとを弾圧、投獄し、そして変革を求める声と動きをあらゆる手段を用いて潰していく。多くのメディアで昨今取り上げられる、ポル・ポト政権による大虐殺と内戦からのカンボジアの復興の姿。しかし、その社会の深部では、人間の尊厳をかけた切なる闘いが、今もずっと続いている。

恐怖の圧政に立ち上がった人々

私は、フォトジャーナリストとして、2003年からカンボジアの社会問題の取材を始め、07年からカンボジアに生活拠点を移し、集中的に取材を続けている。特にここ5年間は、フン・セン政権による苛烈な人権弾圧に対し、真の正義、真の平和の確立を求めて命をかけて立ち上がる人々の姿を取材している。

政権に異を唱える人びとへの弾圧は、フン・セン首相率いる人民党が政権を支配するようになってから途切れることなく続いてきた。その動きが顕著に表れるようになったのが、13年の総選挙以降と感じている。

総選挙では、変革と民主化の確立

を掲げ誕生した最大野党「カンボジア救国党」が、人民党を瀬戸際まで追い詰める大躍進を果たした。それと同調するように、不当に抑えつけられてきた人びとが政権に対して勇気をもって立ち上がり、激しいデモを繰り返した。軍や立法機関を始めとした主要な国家機関のトップを人民党で占め、自分たちに有利な選挙態勢を全土で構築してきた人民党にとって、その存在は脅威となった。

その後、変革を恐れた政権は、救国党や人権NGOなどにも弾圧の手を伸ばし、人権活動家たちの逮捕、著名な政治評論家の暗殺、外国人の人権活動家の強制送還、デモへの取り締まり強化、メディア、市民への脅迫が次々と発生した。

満員の来場者。大学生の姿も目立った

そして、今年7月に5年ぶりの総選挙をむかえる中で開催された昨年6月の地方選挙でも、政権の意に反し、救国党が大きな躍進を果たす結果となった。若者が多い首都プノンペン、最大の観光都市シェムリアップ、地方都市コンポントム、コンポンチャムで救国党が勝利を収めた。真の社会正義、そして民主化の確立。人々は救国党にその願いを託した。

最大野党が、NGOが、メディアが潰されても

だが、その願いの灯は急速に失われ、今、まさに絶えようとしている。地方選挙の結果によって、さらなる危機感を抱いた政権は突如、救国党党首ケム・ソカー氏の逮捕に踏み切った。昨年9月3日になったばかりの深夜の出来事だった。そして、他の救国党党員にも逮捕の手が伸び、救国党主要メンバーの多くが国外へ脱出する事態となった。その後、11月17日、カンボジア最高裁は救国党を解党、消滅に追い込む決定を下し、変革の希望を託されていた救国党は権力によって葬りさられた。人民党に対抗し得る唯一の最大野党が、カンボジアから消えた日だった。

そして、救国党が選挙で勝ち得たはずの議席は、他の小政党へ分配されていった。さらに、逮捕されているケム・ソカー党首が02年に創設したカンボジアを代表する人権NGO、Cambodian Center for Human Rights（CCHR）が「民主化、変革といった外国人の考え方に追従している」という理由で政権により閉鎖命令が下された。

弾圧はこればかりではない。内戦以後のカンボジアのジャーナリズムを24年間リードし続け、政権の弾圧に屈せず報じてきた英字紙「カンボジア・デイリー」が、突如政権により6億9千万円の税支払いを突き付けられ、昨年9月4日に廃刊に追い込まれた。

アメリカ資本のラジオメディア、「ラジオフリーアジア」もプノンペン支局が閉鎖に追い込まれ、同社のジャーナリスト2名も、スパイ容疑をかけられ逮捕された。

政権にとって不都合な報道、活動を行う存在は、徹底的に潰され消されていく。それが今のカンボジアの現実だ。政権は、今年7月の総選挙を公正に行う意思がないことを、一連の弾圧で世界に見せつけた。今は、恐怖の圧政によりデモを行うことすらできない。権力にしがみつき、完全なる独裁政権へ没落していくカンボジアの姿が今、ここにある。

私はこれからも、不正義の中で涙を流し、当たり前の社会正義の確立を求めて、非暴力で立ち向かう屈せざる人々の姿を伝え続けていきたい。そしていつの日か、彼らの望む未来がこの国にもたらされた時、その歓喜の姿をファインダーから見つめ、シャッターを切っていたい。

フォトジャーナリスト　高橋智史

日本大学芸術学部写真学科卒業。2003年からカンボジアを中心にアジアの社会問題と人々の営みを撮り始める。2007年よりカンボジアの首都プノンペンに拠点を移し、秋田魁新報新聞連載「素顔のカンボジア」にて約4年間、同国の記事を発表。現在も土地強制収容などの人権問題に焦点を当て、Cambodia Daily, CNBC, The Guardianなどの英字メディアへの掲載を中心に取材を続ける。2014年第10回名取洋之助写真賞、2016年三木淳賞奨励賞受賞。著作:フォトルポルタージュ「素顔のカンボジア」(秋田魁新報社)等。

公式ウェブサイト　http://satoshitakahashi.jp/

栃木県那須塩原市にあるアジア学院では、研修生たちが自分たちで作物を植え、家畜を育て、実った稲を自ら収穫する。これまで何度か日本に来日はしていたが、田んぼに足を踏み入れるのも、農作業を長期間にわたって実践するのも初めてだったドゥドゥ。湿度の高い日本の夏に辟易しながらも、9ヶ月間の研修プログラムを完遂した。写真右はドゥドゥと同じ期間にアジア学院でボランティアをしており、今回インタビューをしてくれた田中春音さん。

［報告］南アフリカ現地スタッフの半生

人生で学んだことを子どもたちとの活動に

JVC南アフリカで働くHIV/エイズ事業のプロジェクトコーディネーターのドゥドゥジレ・ンカビンデ（通称ドゥドゥ）は、HIV陽性者の支援や生活改善のための家庭菜園の普及などに取り組んでいる。このたび、農村リーダーを養成する栃木県のアジア学院での9ヵ月間の研修のために来日し、リーダーシップのあり方、地域資源を使った有機農業などを学んでいる。南アフリカの現状、そして今回の経験を南アフリカでどう活かすのかの展望を聞いた。

南アフリカ事業HIV／エイズプロジェクトコーディネーター
ドゥドゥジレ・ンカビンデ

インタビューアー　田中春音（2016年度東京事務所インターン）

相互扶助の子ども時代

私は、北西州のジョナサンという小さな村で祖母の元で育ちました。祖母はトウモロコシやカボチャ、豆を育て、ヤギ、鶏、羊を飼い、それらを売り生計を立てていました。当時南アフリカは、アパルトヘイト下でしたが、買い物に行かずとも自給自足できていて、自分を貧しいと感じたことはありません。

祖母はお金持ちではありませんでしたが、よく料理を多めに作り、近所の困っている人々に分けていました。彼女から多くのことを学びました。謙虚でいること、自分がもつものを必要とする人々と共有することです。これらの教訓は、今の私に活かされています。

祖母は私を実の子どものように育ててくれました。同じ村には学校に行けない子も多くいましたが、祖母のおかげで私は学校に行くことができたのです。

その祖母を16歳で亡くしたときはとても辛かったです。でも、地域の人たちが孤児になった私の生活を支えてくれました。かつては、困っている人がいれば互いに助け合う相互扶助の関係がありました。

高校卒業後、ジョハネスバーグの叔母の元で暮らしました。大学進学が希望でしたが、経済的理由から行けず、5年間、叔母が運営するリサイクルショップを手伝いました。

JVCスタッフとしてHIV陽性者をサポートする

JVCを知ったきっかけは、「JVCが専門学校へ行く資金をサポートする」との話を聞いたことです。当時JVCは国連と協力し、アフリカ諸国からの難民やアパルトヘイト下で教育を受けられなかった南アフ

リカ国内の若者への専門学校進学を支援する事業を行っていました。私はこれに応募し、専門学校で総務的な仕事を学ぶことができました。

学校への交通費を賄うため、ＪＶＣの事務作業を手伝い始めました。卒業後もＪＶＣでボランティアを続け、１９９８年にスタッフとして採用されました。これはとてもラッキーでした。私はずっと、ソーシャルワーカーとして働くことで地域への恩返しを望んでいたからです。

初めは総務を担当しましたが、約10年前からＨＩＶ／エイズ事業のプロジェクトコーディネーターを担うようになり、村で人々と直接活動するようになりました。

活動で大変だったのは、エイズ患者宅の訪問です。その苦しい状況を目のあたりにするのが辛かった。また、昔と比べ、農村地域でも相互扶助の関係が弱く、一人で病気に苦しんでいる人や、両親を亡くした子どもがたくさんいます。

私は地域の母親によるボランティア団体と協力し、ＨＩＶ／エイズに関する正しい知識の普及や、両親を失った子どもの支援に努めました。こうした支援は、簡単に効果が現れません。村で話をしても、すぐに村人が変わるわけではないからです。

しかし、徐々に地域の人々がクリニックにＨＩＶ検査に行くようになり、自暴自棄だった陽性者たちが適切に服薬し、自身の健康を気遣い始めるなどの変化を見たとき、やりがいを感じました。

現在のコミュニティーで起きている問題

私たちが支援している地域では、仕事がない、ＨＩＶ感染の広がり、親のいない子どもなどの社会的課題があります。近年では、貧富の差も広がっています。多くの若者が仕事探しに都市へ行っても仕事はなく、都市ではスラムも増えています。

そういったなか、「フードセキュリティー」は大きな問題の一つです。

アパルトヘイト下で私たち黒人の暮らしは破壊され、現在も、農村部なのに農業をする人を見ることはわずかです。そしていまだに、自らのためではなく「白人たちのためにどこかで働く」ことが仕事だという意識があります。このため仕事がなければ食べ物を得る手段がないのです。多くの若者が都市に行くため、農業人口も減っています。

また、その農業にしても、多くの農家がＧＭＯ（遺伝子組み換え作物）の種をそうとは知らず使っています。政府が、普通の種との違いを説明しないまま無料「支援」するためです。主食であるパップの原料はトウモロコシですが、南アフリカでは90％以上がＧＭＯの種で育てられています。

私自身、ＪＶＣと出会うまで自国の農業やＧＭＯの問題やＨＩＶ陽性者の苦しみを知らず、社会にある課題に無関心でした。ＪＶＣでの活動は、自分の目を開かせてくれた。私の人生のターニングポイントの一つです。

アジア学院での学びと実践したいこと

アジア学院の研修では、learning by doing（実戦で学ぶ）といって、頭にある知識だけではなく、自身の経験や実践を伴ってこそ本当に理解し伝えることができること、周りの環境を変えたければ、まず自ら実践して変わることを学びました。

もう一つ学んだのは、栄養と健康の重要性です。自然を尊重し、有機農業を通して自分で食べ物を育てる大切さを知りました。それは、自分自身の人生をケアして生きることにつながります。

今後は、ここで学んだことを、特に子どもたちとの活動で活かしたい。人生に大切なことは何か、どこに価値をおくのか、そんな考え方も伝えていきたい。子ども時代に学んだことは、その子の将来に大きく影響します。私たちがいい例になれば、言葉で伝えなくとも、子どもたちはそれに習い、学ぶことができます。

また、都会に行こうとする若者が多くいるなか、子どもたちに、自分の暮らすコミュニティーでもできることがあると伝えることも大切です。子どもたちは将来を担う希望です。子どもたちをサポートすることは私にとって大きな喜びなのです。

昨年8月に訪問した際のキルクークの市街地は普段どおりだった。独立を問う住民投票の1ヵ月前であり、今にして思えば、「嵐の前の静けさ」だったのかもしれない。

［報告］イラク北部の現状について

分離独立を求める住民投票をきっかけに深まる混迷

昨年9月、イラク北部で実施されたクルド人自治区の独立の是非を問う住民投票。しかしイラク政府からは投票そのものの違法性を指摘されており、軍事的な衝突まで招いてしまっている。その背景にある状況を、現地で見聞きしたこととあわせて報告する。

イラク事業担当
池田 未樹

「独立」を求めた住民投票

イラク中央政府は2017年10月15日夜から16日にかけて、JVCの活動地でもあるイラク中北部の都市であるキルクークに進軍しました。16日未明、キルクーク市郊外においてイラク軍とクルド人戦闘員らの間で局地的な武力衝突が起こり、イラク軍は油田、発電所、基地など主要施設を制圧しました（注1）。JVCのパートナー団体である現地NGOであるINSANの代表であるアリー氏から、「昨夜の攻撃は本当に怖かった」と、普段「怖い」という言葉をあまり使わない彼からこのような表現で連絡がきたことから、現地の緊迫した様子が伝わってきました。その後、数万人の市民がバスなどでキルクークを離れ、クルド人自治区の中心都市アルビルなどへ避難したそうです（クルド自治区からの国際便も運行停止したため、JVCが昨年11月に予定していたアリー氏の招聘も延期となりました）。

この衝突の背景には、昨年9月25日にイラクのクルディスタン地域において実施された、イラク中央政府からの分離独立の是非を問う住民投票の実施があります（投票の結果、9割以上が独立に賛成、注2）。イラク中央政府をはじめ近隣国や米欧の反対を押し切って実施されたこの住民投票に対して、イラク中央政府は投票そのものの無効化を要求、クルド自治政府に対して経済制裁などの圧力を強めます。クルド自治区の経済的な生命線である原油生産拠点（埋蔵量は1150億バレルで世界第3位、イラク国内で最大）を軍事的に奪うことで、締め付けを強める姿勢をみせたことになります。

住民投票が行われる約1ヵ月前の昨年8月末、キルクークで行われ

◎注1…BBC news "Kirkuk: Iraqi forces capture key sites from Kurds"（2017年10月16日付）http://ngo-jvc.info/2Dh04XZ
◎注2…BBC news "Iraqi Kurds offer to 'freeze' independence referendum result"（2017年10月25日付）http://ngo-jvc.info/2DgXWQE

た子どもたちを対象としたワークショップの視察のため、筆者はINSANの事務所を訪問しました。選挙を約1ヵ月後に控えた街にはキャンペーンの広告などがあるわけでもなく、以前訪問した時と変わらない落ち着いた様子をみせていました。今回の衝突の情報を聞いた時に、訪問時の雑談の中で、INSANスタッフのラミアさんが「この後、キルクークで何か起こる気がする」と不安混じりに言っていたことを思い出しました。その不安が、図らずも的中してしまったことになります。

クルド自治区が置かれている状況

クルド自治政府の財政はイラク中央政府からの歳入に頼る部分が大きく、中央政府の歳入の約12%が毎月クルド自治政府へ送金されてきました。クルド自治政府は07年頃から域内の油田を海外の石油会社に開放するなど本格的に油田開発を開始、13年の末にはトルコ政府の支援を得てトルコ経由地中海向けのパイプラインが完成しました。こうしたことは、中央政府が管理しないところでイラク産の石油が国際マーケットに供給されることを意味するため、中央政府は翌14年、クルド自治政府への制裁措置として予算送金をストップしました（注3）。クルド自治政府の歳入は約8割をこの中央政府からの送金が占めていたため、大きな影響を受けることになりました。

一方で、同年6月以降はイスラム過激派（いわゆる「イスラム国」）の影響からクルド自治区に流入した国内避難民（以下IDP）は約100万人以上になったと言われています。この急激な人口増加は受入地域の上下水道や電気等の公共インフラを逼迫させ、家賃や交通費を含む物価が高騰する一方で、労働賃金は低下し、病院での医薬品の不足から、受入地域の中にはIDPに反感を抱く人もいました。さらに、IDPのふりをして市内に侵入する戦闘員に対する治安上の強い警戒感から、IDPと地元住民の緊張が高まった時期でもありました。

中央政府からの送金停止、「イスラム国」の脅威、また同時期に進行していた国際的な原油価格の下落などから、クルド自治区の経済は大打撃を受けました。自治政府は対策として14年末、クルド自治政府がイラク政府に石油の開発権を引き渡すことと引き換えに、再度予算配分を得るという政治合意を結びました。しかし、クルド側が引き渡した石油量と中央政府からの送金額を巡って諍いが絶えず、半年もせずにこの合意は破棄されています（注4）。

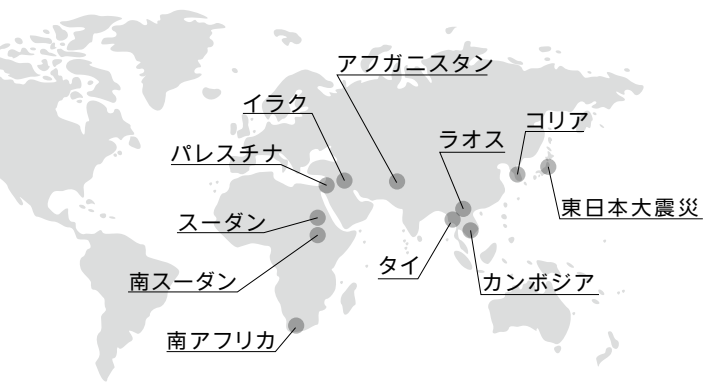
原油価格がいまも下げ止まったままの状況を考えれば、中央政府からの送金があったとしても財政赤字は止められず、クルド自治政府は「持続可能」な経済構造を構築する必要に迫られていると言えます。クルド自治政府はその対策のひとつとして、16年1月から公務員給与を15%～75%カットすることで、給与支出を25%も削減しました（注5）。前述のアリー氏のパートナーであるジュワンさんはキルクーク市の東にあるスレイマニア市の大学で公務員として働いていますが、580ドルの給与のうち285ドルしか受け取れていないと言います。スレイマニア市内ではこの給与減額に対してデモが頻繁におきており、ジュワンさんも同僚とストライキに参加したそうです。彼女は「党が国営企業のようになっていて自治政府の収入がいっている。汚職や賄賂も多い。多くの公務員の給与が出ておらず、キルクークを含めてクルド自治区では経済が回っていない。私たちにとって財政的負担は死活問題だわ」と話してくれました。

今年の議会選挙に向けて

こうした影響の発端となった昨年の住民投票をめぐっては、これに反対するアラブ系議員が多数を占めるイラク議会は、自治区の外にありながら住民投票の実施を決定したキルクーク県の知事の解任を決め、これにクルド側が強く反発するなど、対立は深まっています。

そして今年5月にはイラク議会選挙及び地方議会選挙が実施されます。今後、選挙に向けて予断を許さない状況が続きます。JVCは引き続き現地の状況を追っていきます。

◎注3…吉岡明子「経済的自立を模索するイラク・クルディスタン」『アジ研ワールド・トレンド』アジア経済研究所、2017年、P10
◎注4、◎注5…注3と同一、P11



JVCは現在、11の国・地域で活動しています。

プロジェクト一覧

9月後半～12月前半

イラク

現地パートナー団体を招へい

新潟で非暴力トレーニングの研修を受けるアソ氏。どのような能力を持っていれば平和をつくることが可能か、チームで話し合いながら可視化し整理する

イラク北部キルクークの現地NGOでJVCのパートナー団体でもあるINSANの代表アリー氏と管理部門を担当するアソ氏が、12月7日から約10日間の日程で来日した。

今回で3回目となる新潟で開催した非暴力トレーニングの講習では、新潟国際情報大学教授でJVC理事でもある佐々木寛先生から、キルクークにおいて子どもたちを対象に実践可能な様々なワークを2日間に渡って指導していただいた。今回は、「ワークで実施した内容を帰宅後に両親との話題に使えるように」という目的で、様々なツールを使ったワークを行った。

その後、アリー氏は富山県、三重県にて講演した。今回で4度目となるチューリップ栽培の盛んな富山での講演では、来場者から「童謡『チューリップ』をイラクの子どもたちに歌ってほしい。この歌は多様性を受け入れることについて良い歌詞だ」と富山のチューリップ球根がアリー氏にプレゼントされた。また、アソ氏はJVC東京事務所にて、カメラなどの広報機材の使い方やそれで得た素材を発信する上での留意点、またジャーナリズムに関しての研修を受けた。

最終日には、JVCスタッフと一部メディアを招いて内部報告会を実施した。8月末から約1ヵ月間にわたって実施された国内避難民と受け入れコミュニティの子どもたちを対象にした平和教育の様子や、また、10月の軍事衝突の背景や11月の地震のことについても報告があった。（池田）

タイ

日・タイ経験交流

10月1日～22日までの約3週間、タイから5名のNGOスタッフ、都市農業の実践者、若手農家が来日し、日本各地での有機農業の取組みを視察した。地域の自給と共に、生産者と消費者がつながる「安全な食の流通」システムをタイで構築するために日本での先行事例を学ぶことが目的。生活協同組合（生活クラブ生協）や市民農園（八街ふれ愛オーガニックファーム、自給農園ミルパ）、食とエネルギーの地域循環の取組み（埼玉県小川町）を視察。生活クラブでは理念に留まらず、取引先の農家の実践、流通センターでの取組み、組合員（消費者）の思いを聞くなど、生産から食卓まで一連の流れを学ぶことができた。

（下田）

コリア

絵画交流『南北コリアと日本のともだち展』／大学生交流

朝鮮半島を巡る軍事的緊張が続いている。JVCは他NGOと共同で9月22日にポジションペーパー「東北アジアの平和は武力では実現できない－私たちは、市民による顔の見える交流と対話をこれからも続けます」を発表。軍事挑発ではなく対話の重要性を訴え、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）と市民レベルでの交流を継続する立場を表明した。

『南北コリアと日本のともだち展』実行委員会では、11月に中国を訪問、吉林省延辺朝鮮族自治州の延吉市少年児童図書館で絵画制作ワークショップを実施した。12月に訪朝報告会を開催し、8月の訪朝メンバーに交流の様子などを報告していただいた。

（今井）

南スーダン

国内避難民キャンプでの支援

国際社会の仲介努力が実り、12月21日に政府と反政府各派による停戦合意が交わされた。しかし、すでに一部で合意に反して戦闘が行われており、先行きの不透明感は強い。

11～12月にかけてスタッフの今井を首都ジュバに派遣。昨年9月から実施してきた緊急支援に区切りを付け、国内避難民キャンプの子どもたちへの学用品支給など就学支援を開始した。キャンプの女性たちとの話し合いでは、食料不足に対して、自分たちで小さな市場を開設して手づくりの菓子や家庭菜園の野菜を販売するなどの収入向上活動が始まっていることが分かった。このような動きを広めるための支援を新年度に向けて計画している。（今井）

パレスチナ

若者のレジリエンス向上事業／栄養失調予防事業／アドボカシー

地域の幼稚園に出向いてイベントを開催することで、子どもたちに楽しい時間を提供するヒズマ地域の保健委員会のメンバー(東エルサレム)

◎若者のレジリエンス・地域保健の向上事業(東エルサレム)：保健委員会の生徒たちは、様々なトレーニングをこの一年間を通して410時間以上受講しており、そこで得た知識を他の生徒に伝えるとともに、自身が通う学校や地域に貢献する活動（例えば健康な食習慣を促進するイベントの開催など）を実施している。そこで、生徒たちによるこうした活動を集めて発表し上位校を表彰する発表会が提案された。これを、本事業の最終年度である来年度に実施することをパレスチナ自治政府教育省と合意した。

◎栄養失調予防事業（ガザ地区）：ガザ地区で最も脆弱な地域であるマガジ・ブレイジ難民キャンプにおいて4月から実施していた本事業は、11月末で終了した。これまでに、30人の女性のボランティアによるカウンセリングで、幼い子どもを持つ3,701人の母親が、子どもの健康・栄養・発達に関する知識を得た。また、グループ単位での意識向上セッション（前述の知識提供に加えて調理実習なども含む）を404回実施した。これらの取り組みにおいて、特に育児面に関しては「前向き子育て」講習に基づいて実践してきた。また、1,500人の子ども（6～59ヵ月まで）に関して成長度合いが確認され、発育の遅れや障がいが見られる子どもについては適切な対処がとれるよう対応してきた。（山村）

スーダン

紛争による避難民・難民への支援（南コルドファン州）

出生登録証を受け取った子どもたち

◎出生登録支援：避難民児童が就学機会や5歳以下の医療費免除を得るための出生登録支援は、11月までに3地域で全ての手続きが完了し、525名に登録証が発行された。11月15日に社会福祉省、児童相談所、JVCの共催により登録証授与式が行われた。裁判所、内務省などの事業関係者や国連関係者、各対象地域から出生登録を取得した母親の代表も参加し、支援に対する感謝の言葉が述べられた。

◎小学校支援：多くの学校で教室用の机いすが不足しているため、修理および新規製作分あわせて1,030セットの机いすを11校に支援した。

◎井戸支援：井戸の再掘削について、2学校の敷地内または敷地近くでの掘削に成功し、それぞれハンドポンプを設置した。また、一部帰還がみられるリフ・アシャギ郡において、給水施設などの状況調査を開始した。（橋本）

南アフリカ

HIV陽性者支援（リンポポ州）

青少年対象の研修において講師を務めてきてくれたケトさん。ボランティアたちは、彼の所属する団体から資金調達の方法なども学んだ

2017年度はHIV/エイズ関連事業の最終年にあたる。活動は、村の子どもケアセンターのボランティアとセンターに通う10代の青少年約100名を主な対象として実施している。9月に入り、新たな行政区分に反対する地域の住民によるストライキが再発、ケアセンターも閉鎖され、約1.5ヵ月活動村に入れなくなった。10月下旬に、子どもケアセンターのボランティアを連れて、青少年活動において研修を実施してきた講師が所属する団体を訪問（他州）、同団体のスタッフらと経験交流し、ボランティアたちがセンターを運営において抱える課題の対応方法について学んだ。また、青少年による家庭菜園作りにおいては、自宅に水やフェンスがなくて菜園作りが開始できない青少年を対象に、村内トレーナーの自宅の敷地内のスペースを提供、菜園作りとモニタリングを開始した。（渡辺）

ラオス

農業・農村開発／土地森林保全事業（サワナケート県）

衛星写真を使った村での調査についての研修

新規プロジェクトのMoU（現地政府との活動契約）申請作業を進めている。県での最終的な承認を得て、中央省庁での手続きに入った。

同時に、活動の本格的な開始に向けての準備を進めている。全スタッフに対してラオスの農村の問題を一から考え直し、その解決のための活動を考える研修を行った。またその活動に求められる技術、知識に関する研修を行った。村人にとって必要なものとして見えてきた土地と自然資源を守るために必要となる地図についての研修を行った。特に担当スタッフ2人に対しては、詳細な地図の仕組みや作図方法などについて共有した。また、村人の生活や社会全体の持続的発展に貢献するための法律・政策に関する活動の意義とデータ収集の方法を担当スタッフと共有した。あわせて、新規対象村選定調査に関しての研修を行い、村での聞き取りにおける注意点についての議論や事前の情報収集なども進めた。

9月にNGOグループによる国会議員、県人民議会議員に対する土地問題についてのワークショップにスタッフ1人が参加し、農村の土地問題とそれに取り組む活動について彼らと意見交換する機会を持った。（山室）

アフガニスタン

地域保健活動／
平和活動
（ナンガルハル県）

学校での風邪予防キャンペーンにて。マスクをつけ、衛生環境向上のためのパンフレットを掲げている

学校での保健活動が積極的に行われた。これまでも継続してきた壁新聞（生徒が自分で選んだ保健のテーマについて調べ、作文にしたものをポスターのように編集して校内に掲示する取り組み）に加え、有志の教員によって構成されている「学校保健協議会」によって、応急処置の研修、風邪予防キャンペーン、トイレ掃除などの保健活動が企画・実施された。また、初めての試みとなる校庭でのスポーツ・デイの開催に向けても準備が始められている。

村の女性たちによる保健活動も引き続き実施されている。この期間には文字の読み書きができるメンバーたちに向けて３日間の研修を行い、妊娠・出産に関わるケアなどの保健の知識向上を図るとともに、地域活動の持続性について話し合う場を持った。今年度、彼女たちは村の女性の保健教室の集まりで記録を取るなど、教室をコーディネートする女性地域保健員（CHW）の心強い補佐役となっている。女性が社会に出て活動することが慣習的に難しい中で、自主的に自身の卒業校に赴いて保健教育を実施するなど活躍している。

（竹村）

気仙沼

鹿折（ししおり）地区での
復興支援

鹿折南住宅自治会設立総会で挨拶する自治会役員

11月19日、20日、防災集団移転のアドバイザー派遣を実施した。防災集団移転のアーカイブの目的で、協議会の役員や住宅再建を果たした住民へのヒアリングを行った。また、11月22日には、プロカメラマンが共同建設方式によって再建した住宅の写真撮影を行った。

鹿折地区の災害公営住宅（市営鹿折南住宅）において、行政や地元の支援団体と連携しながら住民の自治会づくりをサポートしてきたが、10月29日に自治会設立総会が開催された。4月末の自治会準備会発足以来、準備会メンバーと共に検討を進めてきた自治会の会則や役員体制、事業計画などが原案通り承認され、市営鹿折南住宅自治会が発足した。

浦島地区の地域活性化に取り組む一般社団法人の設立について、設立時社員になることを希望した住民有志5名と共に準備を進めている。10月以降は、一般社団法人設立に至るまでの具体的な手続きの流れを明らかにした上で、定款の記載内容や事業計画について詳細な検討を重ねている。今後は、より多くの協力者が得られるように、改めて地域住民への協力呼びかけを進めていく。（横山）

南相馬

災害公営住宅での
サロン運営

引き続き原町区の大町災害公営団地での住民主導によるコミュニティづくり支援（サロン運営）を継続している。大町の取り組みは、徐々に住民主体のコミュニティづくりのモデルケースとして認知され始めた。大町と復興公営団地（原発被災者向け）の住民間の交流を進めてきており、12月には大町で「クリスマス会」を住民が開催。準備や当日の運営を住民自身で行い、75人の参加者があった。今年1月には孤独死防止の先進事例、千葉県松戸市常盤平団地地区社協の方を南相馬に招き、研修会を開催予定。現在JVCが支援する大町災害公営団地のサロンは常盤平団地をモデルに運営体制の構築を行った。

（白川）

カンボジア

農村における生業改善支援／
環境教育／試験農場

食料確保の手段を多様化させることを目的に、多年生の食用植物（チャヤ、モリンガ―）の栽培を奨励する活動として、それらの調理方法や栄養を伝える調理実習を実施した。

住民が利用できる食料資源を増やすための食品加工研修を10月から順次開始している。過去の研修で現在も食品加工を自分たちで行っているドンソック村の女性が講師となり、酢漬けや塩漬けなどの実習を6村で始めている。

12月～2月にかけて実施予定の植林にむけた苗木作りを住民の協力を得ながら進めている。

12月8日に現地調整員として大村を派遣しカンボジア駐在を開始した。

（下田）

調査研究・政策提言

外務省・JICAとの政策協議／
各種提言

◎NGO・外務省定期協議会2017年度　第2回ODA政策協議会（12月13日）：谷山・長谷部・渡辺が参加。
◎2017年度第2回NGO-JICA協議会（10月16日）：長谷部・渡辺がTV会議で参加。
◎第66回財務省NGO定期協議会（12月21日）：渡辺が参加。
◎JICA環境社会配慮助言委員会（10月13日）：渡辺が環境社会配慮ガイドライン見直しプロセスに関する議論に参加。
◎渡辺のモザンビーク入国拒否問題に関して、署名サイトChange.orgで集めた4,516筆の署名を外務省（→河野外務大臣）に10月18日に提出。

（渡辺）

「官民連携」における ビジネスの責任をどう問うのか

地域開発グループマネージャー／南アフリカ事業担当　渡辺 直子

日本がモザンビーク北部で注力する事業はプロサバンナだけではない。北部5州（ナンプーラ、ニアサ、ザンベジア、カーボデルガド、テテ）で行われる「ナカラ回廊開発」があり、農業開発事業・プロサバンナはこれに包摂されている（注1）。今回はこのナカラ回廊開発における「鉄道整備・港湾事業」について、そしてJICAではなくJBIC（国際協力銀行）による企業融資について取り上げる。

「植民地時代より悪い」開発

2017年11月28日、JBICは、民間銀行団とともに、三井物産とブラジル資源大手Valeがモザンビーク北部で実施する鉄道・港湾開発に対し、総額27・3億ドル（約3080億円）の協調融資を行うことを決定した（注2）。このうち約10・3億ドル（1163億円）がJBICから融資され、併せて日本貿易保険による1000億円規模の「保険引き受け」も発表されている。いずれも公的資金、すなわち我々の税金から拠出される。

ナカラ回廊開発のコンセプトは、①内陸や沿岸部で資源開発、植林および農業開発を行い、②その運搬（輸出）のためのインフラ整備として先の鉄道・港湾整備ならびに道路整備を行う、というものだ。広範なバリューチェーン（物流網）の構築による経済成長が謳われるが、JBICの融資決定にあたっては「日本の鉱物資源の確保および安定供給を支援」と説明されている。資源を外へ外へと出す「植民地」型の事業だ。

実は、14年頃より、この鉄道整備事業に対する懸念の声が現地から届けられていた。14年の調査時には、整備事業によりそれまでの旅客車が石炭を運ぶ貨物車へと変わり、人々が生活の足を失いつつあった。それでも駅周辺は人の往来が多く、農産物を売りに来た農民や乗客の間の売買で非常ににぎわっていた。これが16年になると、状況が劇的に悪化していた。①旅客車がさらに減り、駅周辺が閑散として農民らのマーケットが失われた、②線路が地面から3mほど掘られて敷設されており、それに陸橋が渡されないために救急車が通れなくなる、線路を徒歩で横断する際に転落死亡事故が発生している、③強制立ち退きにあい、補償のないまま住居や農地を失う農民が少なからず発生、などである（注3）。現地の人々が「植民地時代より悪い」ともらしていたことが印象に残っている。

環境影響評価は企業のもの？

その直後の16年11月、JBICが同鉄道・整備事業に掛かる環境影響評価（EIA）を終え、融資決定を検討しているとの情報が入り、私たちは本件に関する財務省・JBICとの協議を開始した。そこでは、現地の被害状況を共有、日本政府としての対応を尋ねるとともにEIA英語版の共有を求めてきた（注4）。これに対しては、「補償は支払われている」「被害への対応はなされている」との説明が繰り返されてきた（全長912㎞のうち「影響が大きいと判断した」88ヵ所だけだが）。しかし、88ヵ所の具体的な場所や対応内容の情報はいまだ公表されていない。それどころか、EIA英訳版は「企業のものだから」企業側と交渉するよう言われ、その結果、三井物産からは、こちらが英訳版をどこかで引用して使えば即座に訴えられかねない内容の守秘義務契約が一方的に送られてきた。同事業にはJBICを通じて多額の税金が投じられているのに、なぜEIAの翻訳が企業の所有物とされるのか。そんな論理で情報の秘匿が許されていいのか。そして、これらの協議が継続され、現地の被害回復が確認されないなか、今日のJBICの融資が決定したのである。

「ビジネスと人権」を問う

今、かつて「人々」のためだったはずの援助は、「貿易」「投資」のためだと堂々と謳われ、官民連携の掛け声のもと、投資促進のためとして巨額の税金が企業につぎこまれている。だが「現地に経済成長をもたらす」とされる開発の実態は、先に見てきたとおりだ。そして農民たちは、自分たちのささやかな暮らしを守るために闘うことを強いられている。

確かに、私たちの暮らしに企業の存在は欠かせないだろう。しかし世界中のどこかで暮らす人たちに、こんな犠牲を強いるやり方は許されるべきではない。

こうした中、国際的にはこんな動きも始まっている。国連人権委員会では11年に「ビジネスと人権に関する指導原則」が承認され、現在は「多国籍企業の人権侵害を規制するための新たな国際条約」について協議されている。一方で、17年3月、国連に「小農と農村で働く人々の権利に関する国連宣言」が提出され、採択に向けて協議が継続されている。本稿で述べたモザンビークの一例は、国際的な流れと連動し、世界で共通した課題が見られるということだ。

答えは簡単には出ないけれど、どんな世界を作っていきたいのか。私たちがひとりひとり考え「続ける」必要がある。そしてJVCとしても、ODAの枠を超えて「ビジネスと人権」に目を向け、動き始めていく必要性を痛感している。

◎注1…2011年、JICAが「ナカラ回廊経済開発戦略策定プロジェクト（PEDEC-Nacala）」を立ち上げ、2016年12月に、そのマスタープランが公表されている。http://ngo-jvc.info/2mFmQzl、http://ngo-jvc.info/2r1Icex、http://ngo-jvc.info/2FzH1Xf　◎注2…JIBCサイトより。http://ngo-jvc.info/2mCiSaq　◎注3…現地市民社会組織によるビデオ（http://ngo-jvc.info/2r1K8DP）、渡辺調査報告書（http://ngo-jvc.info/2EGebm）など。　◎注4…事業対象国の言語＝ポルトガル語版のみ公表されている（http://ngo-jvc.info/2Dv2FuT）。

スタッフの
ひとりごと

「ひとりごと」では おさまらないよ…

カレンダー事務局　伊藤　圭

イラスト　かじの倫子

ヤバい。原稿の依頼がきてしまった。何を書こう。ネタがあり過ぎる！どれもこれも語りだしたら、本誌の全ページを使っても足りないくらいだ。困った、とりあえず思い付くままに書いていこう。

まず私は津軽出身で、津軽に関しては本を一冊書けてしまうくらいのウンチクがある。詳しくは私が運営する『津軽スタイル』というサイト（http://tsugarustyle.jp/）を見てください。次は、私が住んでいる東京都青梅市。実は、青梅駅周辺は知る人ぞ知るコーヒーの街なんです。カフェが20軒以上あり、こちらも詳しくは私が運営する『青梅カフェ』というサイト（http://ome.town/cafe/）をご覧ください。

続いてボーイスカウト！友人に誘われて指導者を始めて、気がつくともう20年経ってしまった。お母さんと離れられずに泣きながらキャンプに来ていた子が大きくなり、今では立派に後輩を指導しています。成長したなあとしみじみ。そしてキャンプ！キャンプのために生きていると言っても過言ではない！自然の中にいると自分はちっぽけな存在なんだな、と感じます。自然と共存してこそ人は幸せにつながるのでは、などと火を囲みながら考えたりします。

ああヤバい、文字数が残りわずかだ！『食』こそ、我が人生！自分の身体は自分が食べた物でつくられることを考えると、食をおろそかにはできない。1日3回の食事を楽しめたら人生が楽しくなる、と思うのだ。さらに最近はPTA役員や消防団にも入った。あ、そういえば私は13年のキャリアを持つカメラマンでした。写真のことに関しては…次回！

コネタにゅーす　活動地雑学

バンコクで始まった都市住民による 小さな菜園づくり

タイ事業担当　下田　寛典

タイの首都バンコクで始まった新しい有機農業の取組みがユニークだ。シティファーム・プロジェクトと呼ばれているその取組みは、JVCがこれまで協働してきたタイのNGO・SAFT（Sustainable Agriculture Foundation Thailand）がサポートしている。きっかけは2011年。チャオプラヤ川流域の大洪水でバンコクも広範囲で浸水し交通網も麻痺した。流通が滞り、バンコクのスーパーでは生鮮野菜が品薄になるなど、ちょっとした食料難が起きていたという。そして、「お金をいくら持っていても、食べ物がなければ生きていけない」と気付いたバンコクの富裕層の中から、都市で農業をするこのシティファーム・プロジェクトが生まれた。

ビルの屋上に備え付けられた大量のプランターで野菜を育てる

プランターや鉢を活用して、家の限られたスペースで自給用の野菜を育てたり、病院の隅っこで有機野菜を育てて病院での食事に活用したり、空き地をリノベーションして野菜畑にし、休日には加工品作りやせっけん作りなど様々なワークショップが開かれたりと、シティファームの姿は実に多様だ。その数はバンコクを中心に170を超える。何より実践している人たちが皆、とてもアクティブで楽しみながら活動している。そこには、ひとときのブームで終わる気配はない。近い将来、ビル群の中に緑が茂る、そんな新しい都市像が広がっているかもしれない。

いべんと・ピックアップ!

11/25（土）東京・台東区

スーダンと日本 障がい者スポーツ『ゴールボール』への取り組み

JVCアフリカボランティアチーム　千田尾 恵子

当日は参加者の皆さんと車座になってヒシャムさんのお話を聞きました。

11月25日、JVC東京事務所近くの台東一丁目区民館にて、全盲の在日スーダン人ヒシャム・エルサ―氏を招いてお話を聞く会をアフリカボランティアチーム（以下アフリカチーム）として開催しました。

アフリカチームとヒシャムさんとの出会いは3年ほど前。在日スーダン人のアスマ・シディグさんを招いて「スーダンを満喫！ ～作って 食べて お話を聞こう」を3回開催した際に、そのご夫君であるヒシャムさんからスーダンでの生活や教育についてのお話をしていただき、それが毎回大変分かりやすくかったことがきっかけです。

前半はヒシャムさんがスーダンにいた頃の盲学校と大学生活についてお話を聞きました。皆さんはスーダンの首都にあるハルツーム大学に障害者はどのぐらいいると思われますか？ ヒシャムさんが大学に通われていた約20年前には、18,000人の学生のうち60人いたそうです。当時の大学受験は点字ではなく口頭。入学後の大学の授業も、友人のノートを1～2ヵ月分まとめてコピーしそれを読んで録音してもらって勉強。点字タイプライターは日本製を愛用していました。また、日本では視覚障害者は鍼灸マッサージ師になる人が多いですが、スーダンでは宗教の指導者になる人が多く、道端で急に「私のために祈ってください」と声をかけられたこともあったそうです。

会の後半は、ヒシャムさん自身が学生時代にプレーヤーだった「ゴールボール」についての話題。日本女子代表がロンドンパラリンピックで金メダルを取った競技で、1.25キログラムもある鈴入りの固いボールをゴールに向かって勢いよく転がして得点を競う競技です。投球は最高時速50キロに達するほど速く、久しぶりにボールを持ったヒシャムさん、選手時代の思いがよみがえったようで、いろいろな投げ方を熱く実演していただきました。スーダンでは、障害者スポーツの中で1番人気だそうです。現在ヒシャムさんが活動しているNGOでは、このボールと点字プリンターをスーダンに送る活動をされているそうです。

参加者から、「スーダンと日本での視覚障がい者として生活の様子や、ヒシャムさんの優しい口調でお話を聞けて、スーダンがとても身近に感じられるようになりました」「話す人と聞く人という関係ではなく、おなじコミュニティーの人という感じが持てた」と感想をいただき、「共に学ぶ人」という関係でたくさんのことを広げていきたいな、と思えたイベントでした。

その他の主なイベント

9/30(土)、10/1(日)東京都江東区【出展】
グローバルフェスタ・ジャパン2017

10/7(土) 東京都渋谷区
国際シンポジウム2017 たねがいのちをつなぐ

10/8 (日) 千葉県成田市
チキンカレーを"ほぼ"イチからつくる
千葉県にある農園で、畑や田んぼから採れるもの（野菜や鶏など）で自ら料理をすることを通して、命に向きあう機会を提供しました。

10/9 (月) JVC東京事務所
映画『ソニータ』試写会

10/14(土) 山梨県韮崎市【出展】
東日本大震災被災地応援企画 穴山町サンマ祭り

10/26 (木) JVC東京事務所
映画上映会『0円キッチン』

11/12(日) 茨城県つくば市
『わが盲想』著者・アブディンさんが語る 祖国スーダン

11/21(火) 東京都文京区
カンボジア「最前線」2017
高い経済成長率を維持するものの、いまだ社会状況に様々な課題を抱えるカンボジア。その最新情報をゲストジャーナリストの視点も交えてお伝えしました。

11/25 (土) 東京都台東区
長倉洋海さんトークイベント
JVC国際協力カレンダー2018に写真を提供いただいた長倉洋海さんをお招きして、写真の撮影秘話や世界中でのエピソードを語っていただきました。

12/2 (土)大阪府大阪市、12/9(土)東京都世田谷区
JVC国際協力コンサート2017 第24回大阪公演、第29回東京公演

12/3(日) 東京都千代田区
映画『我々の土地は今』解説
（第11回国際有機農業映画祭内）

12/8(金)～10(日) 東京都品川区
こどもたちの未来とつながろう
プロの写真家の方々によるチャリティー写真展において、アフガニスタンと気仙沼に関するギャラリートークをさせていただきました。

12/9(土)、10(日) 新潟県新潟市
平和の創り方 ワークショップ
～イラクでの取り組み報告会～

12/10(日) 神奈川県横浜市
武力によらない平和構築に向けて
～南スーダンの事例から安保法制を見直す ～

12/12(火) 東京都新宿区
チャリティサロンコンサート GOSPEL&TANGO

12/14(木) 京都府京都市
モザンビーク・プロサバンナ計画とそれに抗する小農民たち

12/16(土) 東京都文京区
学びあいが生み出す農家の未来 東南アジアの換金作物栽培地域における農業の多様化をめざして

12/16(土) 東京都千代田区
紛争地のお仕事　～中東・アフリカの現場から帰国した3人が語る 国際協力 "ここだけの話" !～

12/20(水)　JVC東京事務所
アフリカ「NGO女子」トークイベント ～なかなか聞けない、海外現地スタッフの人生や思い～
スーダンと南アフリカからそれぞれ女性スタッフが同時期に来日したことを機会に、活動地での普段の活動、各国の文化や暮らしを女性ならではの視点からお話しました。

12/21(木) 東京都台東区
トランプ政権「エルサレム首都宣言」の衝撃と、パレスチナの人びとの声
トランプ米大統領の発言以降の現地における最新の現地情勢を一時帰国スタッフがお伝えしました。

12/22(金) 東京都港区
アフリカのイモ食文化のゆくえ

JVCなひと

自分の思いと重なる取り組み

JVCコリアボランティアチーム／カレンダー事務局アルバイト
菊地　真歩

私がJVCと出会ったのは高校三年生の夏のことでした。当時は就職活動の一環でインターネットで「国際協力」「ボランティア」とひたすら検索して一番にヒットしたJVCに行ってみようと、説明会に来たことがきっかけでした。それからはコリアボランティアチームとして、今年に入ってからは平日の事務ボランティア、カレンダーアルバイトとしても関わっています。

なぜコリアボラを選んだのか、当然ながらたくさん質問されます。元から韓国に興味はあったのですが、原点をたどると小学生の頃に出会った中国人の友人の影響が大きかったと思います。その友人は、両親の仕事の都合で少しの間日本で生活をすることになったようで、一年という長いようで短い小学校生活を一緒に過ごしました。お互いに言葉や文化を教え合いながら刺激を受けて、別れの時には「国は近いながらも会えないんだ」という気持ちになったことを今でも覚えています。数年後に、中国から一通の手紙が来ました。元気で過ごしているという近状と、日本と中国で過ごしている場所が違うけどお互いに頑張ろう、また会えたらいいなというような内容でした。今でもその手紙は大事に持っています。

JVCの説明会に来たその日の担当がたまたまコリア担当の方で、『南北コリアと日本のともだち展』の話を聞いたときに当時の記憶が蘇ってきました。『ともだち展』では韓国、朝鮮、中国、日本の子どもたちを絵を通してつなげています。絵画展の際には気に入った絵に手紙を書いてもらい、事務局側で必要なものには翻訳をして本人に届けるところまでしているのですが、「いつか実際に会えたらいいな」と書く子どもも少なくありません。手紙はずっと残るものだから、受け取ってから数年経っても思い出してくれたら嬉しいなと思っています。

私自身、JVCと出会ってからは4年が経ちましたが、まだまだ学ぶことも多いし刺激もたくさん受けます。今年も2月の東京展に向けて準備をしている最中ですので、お時間ある方はぜひ足を運んで子どもたちの絵を見てたくさんのことを感じていただけたらと思いますし、コリア事業以外でもJVCでの様々な活動を通して一歩踏み出せる人が増えたらいいなと思います。

おすすめ本

『それでも、私は憎まない』

イゼルディン・アブエライシュ著／高月園子訳　亜紀書房
2014年1月初版　1900円（税抜）
スーダン事業担当　小林　麗子

本書は、2008年12月から翌年1月に発生したガザ戦争で、イスラエル軍による砲撃により娘3人と姪を亡くした医師による手記である。著者はガザ地区の難民キャンプで生まれ、11人兄弟の長男として厳しく育てられた。家計は苦しかったが、教育さえあれば将来好きなことができるという教師たちの励ましを信じ、優秀な成績で高校を卒業してカイロ大学に進み産婦人科医となった。そしてガザ地区在住というハンデを背負いながらも、医師としてイスラエル側でもキャリアを積む。

「壁」を越えて海外経験も積み、「分断に橋を架ける」医師としての仕事に邁進している最中、8人の子どもの母親であり最愛の妻を突然病気で失ってしまう。妻が病に冒されたときブリュッセルにいた著者がエルサレムの病院にたどり着くまでのエピソードは、読んでいるだけで気が遠くなりそうだ。直行便なら飛行機で数時間の距離。パレスチナ人にはヨルダン経由での入国が指定されているため乗り継ぎ2回の経由便でヨルダンに入り、国境が開くまで5時間、国境のイスラエル側の審査で10時間待たされ、エルサレムに入る検問所で嫌がらせを受けて別の検問所行きを命じられ…。危篤の家族の元に向かう人間に対して、どうしてこんなことができるのか？

そして妻を亡くした数ヵ月後、今度はイスラエル軍の砲撃によって一瞬にして娘3人と姪を失った著者の喪失感、悲しみは想像を絶する。

このような壮絶な経験をしてもなお、「憎しみがある限り紛争は解決しない、共存は可能である」という著者。その信念は、イスラエル人と交流する中で生まれ深まっていった。少年時代に働いた農場のイスラエル人一家との出会い、イスラエル人の同僚や患者と接した経験から、イスラエル人もパレスチナ人も「よく似た人間」であること、「ある一つの命が他の命より貴重だ」などとは決して言えないことを確信したのだ。

昨年10月に著者の講演を聞く機会があり、その時、心に残った言葉を紹介したい。「紛争は人間がつくり出したもの。人間が解決できないはずはない。私たちには希望がある」

募集コーナー

歌声ボランティア募集

JVC国際協力コンサート東京公演は2018年がフィナーレ。オランダより、古楽界の至宝、ヨス・ファン・フェルトホーフェン氏が来日します！最後のメサイアをともに歌いませんか？ 4月4日（水）練習開始です。

演　　目：ヘンデル作曲『メサイア』
本　　番：JVC国際協力コンサート2018
　　第30回東京公演
公 演 日：2018年12月1日（土）15時開演
練習期間：2018年4月4日以降、
　　毎週水曜日18時半～21時
練習場所：日本ホーリネス教団　東京中央教会
　　（新宿区北新宿1-24-12）ほか
練 習 費：一般3,000円（月額）、学生2,000円（月額）

お申込み・お問い合わせ　JVCコンサート事務局　石川
TEL：03-3836-4108　E-mail：concert@ngo-jvc.net

2018年度東京事務所インターン

1年間、週2日、東京事務所で活動することで、NGOの視点や問題意識を学ぶインターン制度。毎年5～10名程度の学生、社会人等、様々な立場の方が参加しています。人とのつながり、JVCから多くの学びを得てください！今年度インターンによる「インターン募集説明会」も開催します。

応募締切：2018年2月28日（水）
◎説明会、応募方法についてはJVCホームページをご確認ください。

お申込み・お問い合わせ　石川
TEL：03-3834-2388　E-mail：concert@ngo-jvc.net

お宝エイド

ご自宅に眠っている「お宝」を集めています

使わなくなった貴金属類やコインなどはありませんか？お宝エイドは、オーナー様のご厚意で、なんと通常査定額に10%上乗せされた額が、JVCに寄付される仕組みです。いただいたご寄付は、JVCの各活動で大切に役立てさせていただきます。2016年度は300万円近いご支援につながりました。お品物の査定額は、後日JVCより書面にて連絡いたします。捨てる前に、ぜひご協力ください！

「お宝」寄付を送る方法

ステップ1　お宝を梱包します。
段ボール5箱以上は直接お宝エイドによる集荷も可能です（東京・神奈川・千葉・埼玉のみ）。

ステップ2　日本郵政（TEL:0800-0800-111）に集荷依頼の電話をする。
◎ゆうパックの着払いをご指定ください。

ステップ3　伝票を書き、発送します。
◎着払い伝票の「品名」欄には、忘れずに「JVC宛『お宝エイド』」と記入してください。

お問い合わせ　お宝エイド受付センター
TEL：03-5719-6665（年中無休、10:30～19:00）

投稿募集中

JVCや会報誌に関するご意見・ご希望をお寄せください。また、「JVCなひと」への自薦寄稿も大歓迎！ JVCの会員になったきっかけや最近の関心事、ほかの会員の皆様へ伝えたいことなど、800字以内でお送りください。そして、「いまさら聞けないQ&A」でも質問を募集中です。会員になって長いけどそういえば聞いてみたいことがあった、まだ会員になったばかりだから教えてほしいことがある等々、なんでも結構です。皆様からの投稿をお待ちしております！

【投稿先】会員担当　宮西まで
FAX：03-3835-0519　E-mail：miyanishi@ngo-jvc.net

募金集計

募金にご協力ありがとうございます。
JVCの活動は、皆さまの募金によって支えられています。
JVCへの募金は、税制優遇措置を受けることができます。

指定先	期間（9～11月）
無指定	11,646,937
タイ	2,500
カンボジア	810,365
ラオス	3,253,033
南アフリカ	93,398
アフガニスタン	1,160,268
イラク	562,400
スーダン	2,088,517
南スーダン	301,028
パレスチナ	2,001,558
コリア	109,600
東日本大震災	490,109
みどり一本	106,500
東京管理	1,015,846
調査研究	159,263
コンサート	21,920
その他	13,141
合　計	23,836,383

※上表に「夏/冬の募金」も含みます

人事

異　動

大村 真理子　カンボジア事務所現地調整員（広報担当より：12月1日付）

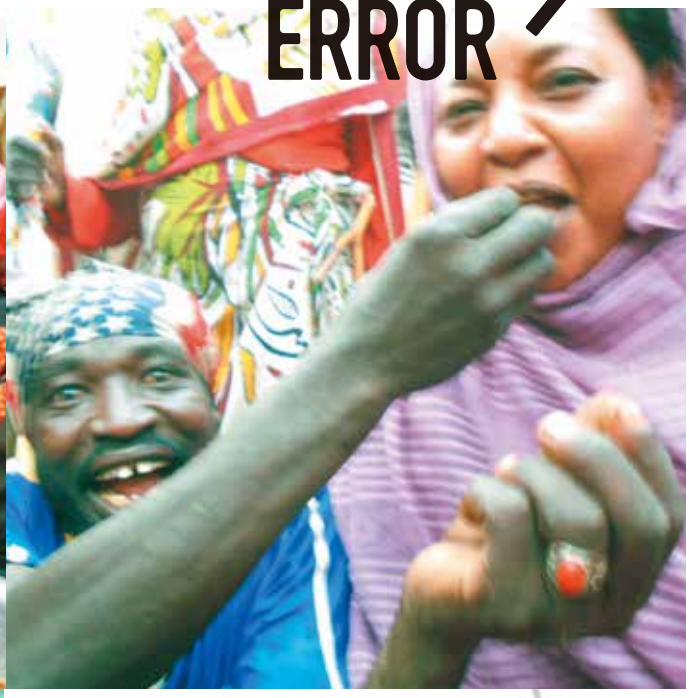
仁茂田 芳枝　広報担当（カレンダー事務局より：12月1日付）

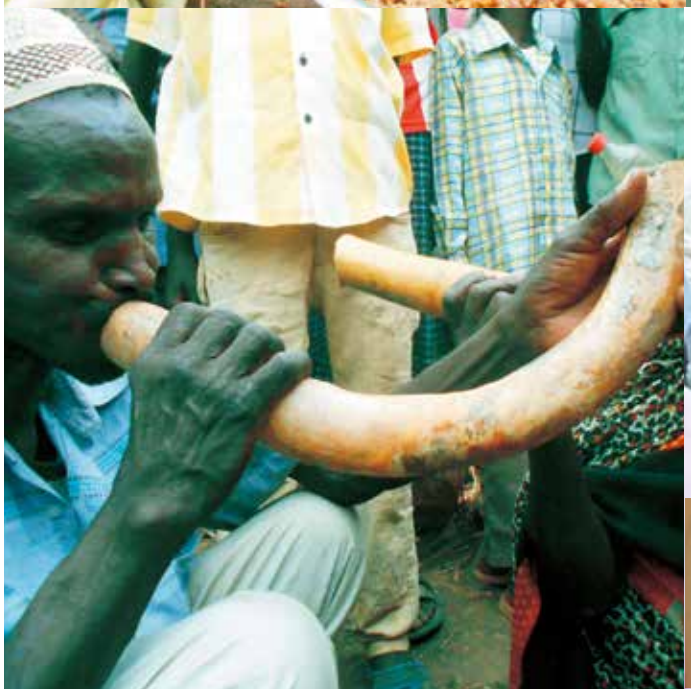
編集後記

昨年末から報道が続くリニア中央新幹線を巡る談合事件。私はリニア計画が及ぼす環境問題や社会問題を取材するが、マスコミはＪＲ東海という大スポンサーへの「配慮」からこれを報道しない。だが、さすがに「事件」は取り上げるようだ。事件が起きてからやっと報道するその姿勢には問題ありだが、一方でより大切なのは、市民やＮＰＯなどが自ら情報発信を続けることにある。インターネットという道具もある今、マスコミに頼るな、自分に頼れと改めて決めた新年です。（樫）

Trial&Error　トライアル・アンド・エラー（試行錯誤）
2018年1月20日発行（通巻329号・年4回発行）　定価 500円（税込）

TRIAL& ERROR





狩猟や作物の収穫を祝うお祭りは、大なり小なり世界中どこにでもあるものだろう。写真はスーダン共和国南部の南コルドファン州で昨年11月に開催されていた現地農村の収穫祭の様子。収穫できたソルガムでつくったお菓子を参列者に少しずつ振る舞い、楽器を吹きならし、女も男も列になって踊り、今年の実りを喜ぶ。

特定非営利活動法人
日本国際ボランティアセンター

日本国際ボランティアセンター（Japan International Volunteer Center）は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉を、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

JVCでは会員を募集しています

会員数（1月1日現在）　**合計1,010名**（正会員561名　賛助会員449名）

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年4回この会報誌と年次報告書をお届けします。
入会のお申し込みや、会員の方の住所変更などは会員担当の宮西まで。

メールアドレス　miyanishi@ngo-jvc.net

- 一般会員　10,000円
- 学生会員　5,000円
- 団体会員　30,000円

それぞれに
正会員と賛助会員があります

JVCのオリエンテーション（説明会）にお越しください

JVCの活動内容をご紹介しています。
お気軽にご参加ください。［事前にご予約ください］

会　場　JVC東京事務所　参加費　無料

第1月曜日　午後7:00～8:30
第4土曜日　午後2:00～3:30

ウェブサイト　http://www.ngo-jvc.net/　メールアドレス　info@ngo-jvc.net　Facebook NGOJVC　twitter @ngo_jvc

◎発行 ＝ 日本国際ボランティアセンター（JVC）〒110-8605 東京都台東区上野5-3-4 クリエイティブOne秋葉原ビル6F TEL 03-3834-2388 FAX 03-3835-0519
◎発行人 ＝ 谷山博史　◎編集人 ＝ 大野和興・長谷部貴俊　◎編集スタッフ ＝ 樫田秀樹・細野純也　◎デザイン ＝ 渡部健　◎印刷 ＝ 株式会社ベスト・プリンティング

本誌の記事・写真などの無断転載・複写を禁じます。本誌は、日本の森の間伐材を有効利用して作られた用紙「間伐材印刷用紙」（古紙90%、間伐材パルプ10%）で作成しました。